THEME

古文6

年　組　番　ID：

氏名

《古文の読解のポイント》

1 表現の工夫を捉える

(1) 次のような表現技法や語句が使われている部分に注意する。

・対句…組み立てや意味が対になる語句を並べて、印象を強める。
・比喩…たとえを使って、印象を鮮やかにする。
・体言止め…末尾を体言（名詞）で終えて、余情を生み出す。
・縁語…関連が深い語を意識して用いる。
【例】松島の月まづ心にかかり→「月」と「かかり」が縁語。
・掛詞…一つの語に意味の異なる二つの語を重ね、イメージを膨らませる。
【例】春立てる霞の空→「立てる」に「春が立つ」と「霞が立つ」という二つの意味がかかっている。
・切れ字…俳句などで、意味の切れ目を示す語。「や・かな・けり・ぞ・よ」など。作者の感動の中心を示し、余情を表す。

(2) 五七調や七五調で書かれている場合は、音読してリズムを味わう。

2 情景を読み取る

(1) 描かれた場面の、季節・時刻・風景・人物を丁寧に捉える。
【例】弥生も末の七日、明ぼのの空朧々として、……。（旧暦三月も下旬の二十七日、明け方の空が朧に霞んで……。）

(2) 引用された故事や漢詩・和歌などのイメージと、その場の情景を重ね合わせて味わう。
【例】三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。（（藤原清衡、基衡、秀衡の）三代の栄華は、（唐の盧生が）うたた寝の間に見た夢のようにはかなく消え去り、館の大門の跡は一里ほど手前にある。）
＊――線部は、「一炊の夢（＝唐の盧生が出世する夢を見たが、それは短い時間だったという話。人生の栄華のはかなさのたとえ）」という故事の引用。

【確認問題】

次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

弥生も末の七日、明ぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰幽かに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し。むつまじき限りは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて船を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ。

（松尾芭蕉「おくのほそ道」より）

〈現代語訳〉

旧暦三月も下旬の二十七日、明け方の空が朧に霞んで、有明の月で光が薄れているものの、富士の峰はかすかに見えて、上野・谷中の桜の枝を、またいつ見られることかと心細い思いがする。親しい人々はみんな昨夜から集まって、舟に乗って送ってくれる。千住という所で船から上がると、前途はるかな旅路に対する感慨に胸がいっぱいになり、幻のように見える千住の分かれ道で、幻のようにはかないこの世での仮の別れと知りつつも、別れを惜しむ涙を流す。

(1) この文章で描かれている情景を説明した次の文の［　　］にあてはまる言葉を、十五字以内の現代語で答えなさい。
・旧暦の三月二十七日の明け方に、筆者が千住で［　　］情景。

(2) ――線部「幻のちまた」に使われている表現技法を次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 比喩　イ 対句　ウ 縁語

〔解答〕

(1) 【例】親しい人々と別れて旅に出る（13字）　(2) ア

古文6

年　組　番　ID：

氏名

／5問

次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

①月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やや年も暮、②春立る霞の空に、白川の関こえむと、そぞろ神の物につきてこころをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうる。

（松尾芭蕉「おくのほそ道」より）

（注）　そぞろ神＝何となく人の心を誘い動かす神

道祖神＝旅人の安全を守る神

三里＝膝頭の下の外側にあるつぼ

〈現代語訳〉

月日は永遠の旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去ってはやってくる年もまた旅人のようなものである。（船頭として）舟の上で一生を送り、（馬方として）馬のくつわを取って老いを迎える者は、毎日が旅であり、旅をすみかとしているようなものだ。（私が尊敬する李白・杜甫・西行といった）風雅の道の先人たちの中にも、旅の途中で死んだ人が大勢いる。私もいつの頃からか、ちぎれ雲が風に身を任せるように、あてどない旅に出たいという気持ちが抑えられず、海のほとりをさすらい歩き、去年の秋に、隅田川のほとりのあばら屋に帰って蜘蛛の古巣を払って住み、次第に年も暮れて、新春の霞がかかった空を見ていると、白川の関を越え（はるかな陸奥の旅に出）ようと、そぞろ神が私に乗り移って心をそわそわさせ、道祖神が招いているような気がして取るものも手につかず、股引の破れを繕い、道中笠の紐を付けかえて、三里にお灸をすえる。

---

(1)　――線部①「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」、――線部②「春立る霞の空に」について、次の問いに答えなさい。

Ⅰ　――線部①と――線部②のそれぞれに使われている表現技法を次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　掛詞　　イ　倒置　　ウ　対句　　エ　縁語

Ⅱ　――線部①と同じ表現技法が使われている部分を古文中から二十五字で探し、初めと終わりの五字を答えなさい。

(2)　この文章では、どのような情景が描かれていますか。それを説明した次の文の［A］・［B］にあてはまる言葉を、［A］は現代語訳の中から十字で書き抜き、［B］はあとから一つ選び、記号で答えなさい。

・風雅の道の先人たちのように［A］という思いが抑えられず、［B］をしている情景。

ア　引越し　　イ　旅の準備

ウ　旅費集め　　エ　思い出話

(1)		(2)	
Ⅰ	Ⅱ	A	B
①			
②	～		

古文６

年　組　番　ID：

氏名

／4問

次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。①舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やや年も暮、②春立る霞の空に、白川の関こえむと、そぞろ神の物につきてこころをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうる。

（松尾芭蕉「おくのほそ道」より）

（注）　そぞろ神＝何となく人の心を誘い動かす神

道祖神＝旅人の安全を守る神

三里＝膝頭の下の外側にあるつぼ

〈現代語訳〉

月日は永遠の旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去ってはやってくる年もまた旅人のようなものである。（船頭として）舟の上で一生を送り、（馬方として）馬のくつわを取って老いを迎える者は、毎日が旅であり、旅をすみかとしているようなものだ。（私が尊敬する李白・杜甫・西行といった）風雅の道の先人たちの中にも、旅の途中で死んだ人が大勢いる。私もいつの頃からか、ちぎれ雲が風に身を任せるように、あてどない旅に出たいという気持ちが抑えられず、海のほとりをさすらい歩き、去年の秋に、隅田川のほとりのあばら屋に帰って蜘蛛の古巣を払って住み、次第に年も暮れて、新春の霞がかかった空を見ていると、白川の関を越え（はるかな陸奥の旅に出）ようと、そぞろ神が私に乗り移って心をそわそわさせ、道祖神が招いているような気がして取るものも手につかず、股引の破れを繕い、道中笠の紐を付けかえて、三里にお灸をすえる。

(1)　――線部①「舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる者」について、次の問いに答えなさい。

Ⅰ　この部分に使われている表現技法を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　縁語　　イ　対句　　ウ　掛詞　　エ　比喩

Ⅱ　この部分と同じ表現技法が使われている一文を古文中から探し、初めの五字を答えなさい。

(2)　――線部②「春立る霞の空」には、二つの意味がかかっています。それを「～と……という意味。」という形で、現代語で答えなさい。

(3)　この文章では、どのような情景が描かれていますか。それを説明した次の文の［　　］にあてはまる五字以内の言葉を、自分で考えて答えなさい。

・風雅の道の先人たちに憧れ、［　　］をしている情景。

(1)	(2)	(3)
Ⅰ		
Ⅱ		

古文6

年　組　番　ID：

氏名

／4問

次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。①まづ高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、蝦夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の草むらとなる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時の移るまで涙を落としはべりぬ。

②夏草やつはものどもが夢の跡

（松尾芭蕉「おくのほそ道」より）

〈現代語訳〉

（藤原清衡、基衡、秀衡の）三代の栄華は、うたた寝の間に見る夢のようにはかなく消え去り、館の大門の跡は一里ほど手前にある。秀衡の館の跡は田や畑になって、金鶏山の形だけが残っている。（私が）まず（源義経がいた）高館に登ると、北上川（が見えたが、これ）は南部地方から流れる大河である。衣川は和泉忠衡の館があったところを巡って、高館の下のところで北上川と合流する。泰衡らの館跡は、衣が関を隔てて南部地方の出入り口を守り固め、蝦夷の侵入を防ぐかのように見える。それにしても（義経が）忠義の家臣をえりすぐってこの城に立てこもり、功名を立てたが、それもほんの一時のことで、今はその跡もなく、ただ一面の草むらとなっている。（私は）国が滅んでも山河は昔のままで、繁栄していた都の面影もなく春の草が青々と繁っていると（いう杜甫の「春望」を思い出し）、笠を敷いて時の過ぎるのを忘れて涙を流したのでした。

藤原氏や義経の功名も、夢のようにはかなく消え去り、今は青々とした夏草が生い茂っていることだ。

(1)　――線部①「まづ高館に登れば」とありますが、筆者が高館から見た情景が描かれているのは、どの文までですか。古文中から探し、終わりの五字を答えなさい。（句読点も一字に数えます）

(2)　――線部②「夏草やつはものどもが夢の跡」とありますが、この句によって、高館の情景はどのようなものになりましたか。それを説明した次の文の［A］・［B］にあてはまる漢字二字の言葉を、それぞれ現代語訳の中から書き抜いて答えなさい。

・青々とした［A］と、藤原氏や義経たちの［B］とを対比することで、人の世のはかなさを感じさせる情景になった。

(3)　この文章には、ある漢詩が引用されている部分があります。その部分を古文中から探し、初めと終わりの五字を答えなさい。

(1)	(2)	(3)
	A	
	B	
		～

古文６

年　組　番　ID：

氏名

／4問

次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。①まづ高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、蝦夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の草むらとなる。②国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時の移るまで涙を落としはべりぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

（松尾芭蕉「おくのほそ道」より）

〈現代語訳〉

（藤原清衡、基衡、秀衡の）三代の栄華は、うたた寝の間に見る夢のようにはかなく消え去り、館の大門の跡は一里ほど手前にある。秀衡の館の跡は田や畑になって、金鶏山の形だけが残っている。（私が）まず（源義経がいた）高館に登ると、北上川（が見えたが、これ）は南部地方から流れる大河である。衣川は和泉忠衡の館があったところを巡って、高館の下のところで北上川と合流する。泰衡らの館跡は、衣が関を隔てて南部地方の出入り口を守り固め、蝦夷の侵入を防ぐかのように見える。それにしても（義経が）忠義の家臣をえりすぐってこの城に立てこもり、功名を立てたが、それもほんの一時のことで、今はその跡もなく、ただ一面の草むらとなっている。（私は）国が滅んでも山河は昔のままで、繁栄していた都の面影もなく春の草が青々と繁っていると（いう漢詩を思い出し）、笠を敷いて時の過ぎるのを忘れて涙を流したのでした。

藤原氏や義経の功名も、夢のようにはかなく消え去り、今は青々とした夏草が生い茂っていることだ。

(1)　――線部①「まづ高館に登れば」とありますが、筆者が高館から見た情景に**あてはまらないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　衣が関　　イ　金鶏山　　ウ　泰衡らが旧跡　　エ　和泉が城

(2)　――線部②「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」について、次の問いに答えなさい。

Ⅰ　これは、ある漢詩の引用ですが、Aだれの、B何という作品ですか。次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

A　ア　李白　　イ　孟浩然　　ウ　杜甫　　エ　王維

B　カ　春望　　キ　静夜思　　ク　絶句　　ケ　春暁

Ⅱ　この漢詩を引用することで、どのような効果がありますか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　一面に生い茂る夏草の生命力の強さを印象づける働き。

イ　藤原氏や義経たちが立てた功名のはかなさを強調する働き。

ウ　高館に立てこもった義経たちの戦いの激しさを想像させる働き。

エ　長い年月に耐えた藤原氏の栄華の素晴らしさをたたえる働き。

(2)		(1)
Ⅱ	Ⅰ	
	A	
	B	

チェック

古文６

年　組　番　ID：

氏名

／3問

次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

あるじのいはく、これより出羽の国に、大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと言ひて、人を頼みはべれば、究竟の若者、反脇差をよこたへ、樫のつゑをたづさへて、われわれが先に立ちて行く。けふこそ必ずあやふきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして、うしろについて行く。あるじの言ふにたがはず、高山深々として、一鳥声聞かず。木の下闇茂りあひて、夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、篠のなか踏みわけ踏みわけ、水をわたり、岩につまづいて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せし男言ふやう、この道必ず不用のことあり。つつがなう送りまゐらせて、仕合したりと、よろこびて別れぬ。あとに聞きてさへ、胸とどろくのみなり。

（松尾芭蕉「おくのほそ道」より）

（注）出羽の国＝現在の山形県と秋田県
最上＝現在の山形県尾花沢市

〈現代語訳〉

（泊めてくれた家の）主人が言うには、ここから出羽の国に（行くには）、（途中に）大きな山があって、道もはっきりしないので、道案内の人を頼んで越えたほうがよいということだ。それでは（そうしよう）と言って、人を頼んだところ、頼もしげな若者が刀身が反り返った刀を腰に差し、樫の木の杖を持って、我々の前に立って進む。今日こそはきっと危ない目に遭う日に違いないと、つらさを想像しながら後ろをついて行く。主人の言葉どおり、高山は深々と木が生い茂り、鳥の声一つ聞えない。木の下は文字通り真っ暗に茂りあって、夜道を進むようだ。雲の端から砂嵐が吹き下ろすような心地がして、篠竹の群生のなかを踏みわけ踏みわけ、川を渡り、岩につまづき、肌に冷や汗を流して、（やっと）最上の一帯に出た。先程の案内してくれた男が言うには、この道はいつも不都合なことが起きる。（しかし今日は）無事にお送りすることができて、幸運だったと、（無事を）喜んで別れた。あとから聞いてさえ、胸がどきどきするばかりである。

(1) ――線部「高山深々として、一鳥声聞かず。木の下闇茂りあひて、夜行くがごとし。」について、次の問いに答えなさい。

Ⅰ この部分は、どのような情景を描いたものですか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 豊かな自然に囲まれた、なだらかな山道の情景。
イ 木がまばらで鳥もいない、険しい山道の情景。
ウ ひっそりと静まり返って、真っ暗な山道の情景。
エ 木が茂り、さまざまな鳥が鳴く、のどかな山道の情景。

Ⅱ 「木の下闇茂りあひて、夜行くがごとし」に使われている表現技法を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 比喩　イ 体言止め　ウ 対句　エ 掛詞

(2) 筆者が苦労して山を越えている情景が描かれた一文を古文中から探し、初めの五字を答えなさい。

(1)	(2)
Ⅰ	
Ⅱ	

CHECK

古文6

年　組　番　ID：

氏名

／3問

次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

あるじのいはく、これより出羽の国に、大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと言ひて、人を頼みはべれば、究竟の若者、反脇差をよこたへ、樫のつゑをたづさへて、われわれが先に立ちて行く。けふこそ必ずあやふきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして、うしろについて行く。あるじの言ふにたがはず、高山深々として、一鳥声聞かず。木の下闇茂りあひて、①夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、②篠のなか踏みわけ踏みわけ、水をわたり、岩につまづいて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せし男言ふやう、この道必ず不用のことあり。つつがなう送りまゐらせて、仕合したりと、よろこびて別れぬ。あとに聞きてさへ、胸とどろくのみなり。

（松尾芭蕉「おくのほそ道」より）

（注）出羽の国＝現在の山形県と秋田県
最上＝現在の山形県尾花沢市

〈現代語訳〉

（泊めてくれた家の）主人が言うには、ここから出羽の国に（行くには）、（途中に）大きな山があって、道もはっきりしないので、道案内の人を頼んで越えたほうがよいということだ。それでは（そうしよう）と言って、人を頼んだところ、頼もしげな若者が刀身が反り返った刀を腰に差し、樫の木の杖を持って、我々の前に立って進む。今日こそはきっと危ない目に遭う日に違いないと、つらさを想像しながら後ろをついて行く。主人の言葉どおり、高山は深々と木が生い茂り、鳥の声一つ聞えない。木の下は文字通り真っ暗に茂りあって、夜道を進むようだ。雲の端から砂嵐が吹き下ろすような心地がして、篠竹の群生のなかを踏みわけ踏みわけ、川を渡り、岩につまづき、肌に冷や汗を流して、（やっと）最上の一帯に出た。先程の案内してくれた男が言うには、この道はいつも不都合なことが起きる。（しかし今日は）無事にお送りすることができて、幸運だったと、（無事を）喜んで別れた。あとから聞いてさえ、胸がどきどきするばかりである。

(1) ——線部①「夜行くがごとし」と同じ表現技法が使われているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　早苗とる手もとや昔しのぶ摺り
イ　閑かさや岩にしみ入る蟬の声
ウ　這へ笑へ二つになるぞけさからは
エ　白魚やさながら動く水の色

(2) ——線部②「篠のなか踏みわけ踏みわけ、水をわたり、岩につまづいて、肌につめたき汗を流して」という描写からは、どのようなことが読み取れますか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　筆者たちが風景を楽しみながら山を越えていること。
イ　筆者たちが苦労して険しい山を越えていること。
ウ　筆者たちがわざと危険な山道を歩かされていること。
エ　筆者たちがきつい山道も平気で歩いていること。

(3) ひっそりと静まり返った山道の情景が描かれた部分を、古文中から十四字で探し、初めと終わりの五字を答えなさい。（句読点も一字に数えます）

(1)	
(2)	
(3)	～